

ローマ時代のイスパニアとイスパニアのラテン語
 《スペイン語の歴史的研究入門》

原題：La Hispania romana y el Latín Hispánico,
 Breve introducción al estudio histórico del español.

エウジェニオ・コセリウ著

1.

ローマの属領として、またネオ・ラテン語の地域的行末としてのイベリアの運命、またロマンス諸語としてのその地の言葉の運命は、第 2 ポエニ戦争時期に決定された。紀元前 218 年、スピキオ (Escipiones) が Ampurias¹ に上陸し、カルタゴの植民地に対して攻撃を開始した。紀元前 206 年にイスパニアのカルタゴの最後の、また重要な要塞である Gades (フェニキア語、Gadir)² が陥落する。このようにして、紀元前 2 世紀のはじめに、エブロ河 (Ebro) の北東の地域、地中海の沿岸地域、ベティカ (Bética)³ がローマの支配下に入るようになる。この紀元前 2 世紀の 100 年間は、ルシタニア人 (Lusitanos) とケルティベロ (Celtíberos) に対する戦闘が続いた、またこれによって、イベリア半島の中央部、西部地域にローマが侵入することになる。イスパニアの征服は、場所を確保することによって、またヌマンシア (Numancia)⁴ の陥落 (紀元前 133 年) などにより確たる領地を所有することになる。しかしながら、土着の民族の反乱およびローマに対する彼ら土着民の戦闘は、続く百年間も止むことはなかった、

¹ 訳注：emporion に該当する地名：Entwisle (*The Spanish Language together with Portuguese, Catalan and Basque*) の著書の最初の頁にある地図に、empurias あり。

² 訳注：今は、カディス (Cadiz：アンダルシア) と呼ばれる。

³ 訳注：ラテン語 Baetica が変化して、スペイン語では Bética となる。

⁴ 訳注：ラテン語の Numantia

またカンタブリアおよびアストリアは、アウグストによって紀元前 19 年になってやっと鎮圧された。しかしながら反乱の内、ある戦闘は、ネロの時代までの紀元 1 世紀まで記録されている。

イスパニアのローマによる支配は、6 世紀間以上にわたることになる。紀元前 218 年から、ヴァンダロ(Vándalos)族、スエボ(Suevos)族、アラノ(Alanos)族等による侵略が始まる紀元 409 年まで続いたのである。しかしながら紀元 3 世紀の中ごろよりすでにゲルマン民族に対する戦闘が半島の前線で始まっていた。これらの戦闘によってイスパニアのそれぞれの領土は、恒常的に不安定な状態が続くことになるが、紀元 6 世紀にイスパニアはゲルマン人の王国、つまり西ゴート王国になる。

イスパニアのローマによる植民地化は、一部の地域を除いて言語ばかりではなく、習慣、市民・法律・軍隊様式、農耕・工業技術、また宗教にまで根本的で急速なローマ化、文明化を進めることになった。またローマの神話ですら、イベリア半島に浸透し、土着民によって取り入れられた（アストリアでは今日まで Diana > ast.xana-“hada” [妖精]が保存されている）。

2.

ローマ化は、特にベティカ(Bética : Baetica)という文化的・社会的レベルが高いところで急速にまた根源的であった。ベティカとは Baetis 河(Guadalquivir)の流域を指す、またこの地域は肥沃な土地であり、イベリア半島の他の地域よりも文化的・文明的により進んでいたところであった。この地域に、205 年ローマの退役軍人によって植民地化された Itálica が設営された。171 年イベリア半島の南部に土着民の女性と結婚したローマ軍の兵士が、Carteia という自由植民地、169 年には Córdoba(Cordúba)が、植民した人が属していた社会的階層によって、ローマ貴族による植民地であると宣言された。

ストラボン(Estrabón)⁵によると、紀元1世紀に Turdetanos(Tartessos) 《タルテシア人》はほぼ完全にローマ化されていた、としている。

他の地域は集中的なローマ化に関して言うと、これは洗練された中庸的というようなやり方ではなく、軍事的で粗野な方法であり、エブロ河の渓谷などは、Tarraco(Tarragona)の中央部からの植民地化が進められた。紀元前90-89年に Salduba(Zaragoza)というイベリアの都市の兵士達は、イタリアの市民戦争(guerrassociales)で戦っていた。同じ地域の Osca(Huesca), Sertorio に、イベリア半島の若き貴族階層の若者に統治方法を教える目的で学校をすでに開いていた。

ローマ化について2つの重要な拠点がある、1つは Bética でありもう1つは Tarraconense である。そして2つのローマ化の潮流がある、1つは Guadalquivir 渓谷より西方へ向かうもの、ともう1つは Ebro 渓谷を越えて北西へ向かうものである。一方、 Levante(Bética と Ebro に挟まれている地中海沿岸沿いの地域)と、イベリア半島の中央部のケルティベロ人(Celtíberos)のローマ化はゆっくりしたものであった。そして更にローマ化が遅れていたのは、ローマの浸透に頑強に抵抗していた西方と北西部の民族(Lusitanos, Galaicos, Astures, Cántabros⁶)である。

3.

ローマの言語であるラテン語は、通商用の言語、また行政上の公用語、文化を担う言語として半島に普及し、徐々に土着の諸言語を少しずつ排除しながら、通用する地域を広げてゆくことになる。こ

⁵ 訳注：ローマ時代のギリシャ人歴史家・地理学者（紀元前64年～紀元後21年）『地理誌』（17巻）を著す。

⁶ 訳注：Lusitanos, Galaicos, Austures, Cántabros という地域にすんでいたローマ進入以前の先住民族は、ケルト人であるとされている。

の土着語は田舎で使われる言葉になり、私的で家族生活にかかわるものに限定されるようになる。しかしながら、土着語が完全に消滅するまでには数世紀を要したのである。実際に、ローマ化が始まって数十年から、紀元後になるまでラテン語に土着語などを起原とする語を付け加えた混合的な名称が都市名なったものがある：バスク語起源(-urris, cf. Calagurris > Calahorra), ケルト語起源(-briga, -olca), またはイベリア語起源(-iria)例：Gracchurris(Alfaro)などがある。

Tiberio Sempronio Graco によって紀元前 178 年につくられた町である Juliobrīga, Caesarobrīga(Talavera), Augustobrīga(Ciudad Rodrigo), Flaviobrīga(Bilbao o Portugalete), Iria Plavia(Patrón), Octaviolca などの地名がある。上に記した都市名は、紀元 1 世紀頃ばかりではなく、シーザーとかアウグスト、フラビオ皇帝の時代にも、ケルト語起源の *briga* また *olca*, またイベリア語起源の *iri* などがまだイスパニアで使われていたことを示している。またこのことは、土着語語は完全には消滅していなかったということを意味する。一方著述家などがこのことを明確に肯定しているものもある。例えばキケロ(Cicerón)は、⁷*De Divinatione* で貴族院で通訳なしで発言するイスパニア人の議論を聞いているときの違和感について発言している (“*Tamquam si Poeni aut Hispani in senatu nostro loquerentur sine interprete*”) ; タキティウス⁸(Tácito)によると元老院の Lucio Pisón の暗殺に係わっていると非難された Termes(act. Santa María de Termes, Soria)の土着民について、その共犯者を密告を否定する際には、自

⁷ 訳注：(Marcus Tullius Cicero マルクス＝トゥルリウス＝キケロ) ローマの政治家、雄弁家、文人。雄弁術をもって政界に進出。執政官に選ばれ、カティリナの陰謀を暴露して「国父」の称号を得る。のち、アントニウスを攻撃し、暗殺された。「国家論」「法律論」「義務論」「友情論」など多方面に著作を残す。(前 106～前 43)

⁸ 訳注：Publio Cornelio Tácito (56 - 118), fue un senador, cónsul y gobernador romano.

らの母語で話をした (“*Voce magna, sermone patria, frustra se interrogari clamitavit*”); と伝えている。Plinio el Viejo は、イスパニアの金属に関する幾つかの土着語が分かったが、Silvio Itálico は、彼らの“母語”で歌っているガリシア人について言及している。また Pomponio Mela y Marcial は、イスパニア人の名前の幾つかについてその発音が難しいことについて述べている。ストラボン は、彼の時代のイスパニア地方の内、Bética 以外ではまだローマ化されていないと述べている。またローマにおいても、アドリアヌス帝 (Adriano) の母堂は “イベリア語” を話し続けていたことも承知している。

4.

このようなこともあるが、すでに記したようにイスパニアのローマ化は比較的早く進み、また根本的なものであった。このためにイスパニアは、ローマ帝国に次ぐ第二の強国となり、ガリアと共にイタリアそのものまたローマ市のライバルともなった、カラカラ帝⁹(Caracalla)が帝国のすべての家臣に市民権を与える (紀元後 212 年) ずっと以前に、Vaspasiano はイスパニア人に市民権を与えている (紀元前 70 年)。

イスパニアのローマ人は、すべての市街、植民地を造り、その多くは現在までも設立者の名前を保存している。それで、Mérida (< Augusta Emerita), Lugo (< Lucus Augusti), Medellín (< Colonia Metellinensis, これは Cecilius Metellus という名前よりこのように呼んだのである)、Pamplona (Pompeyo の名誉を称えてこのように呼ぶ)、Mongó (< Mons Iovis), Jove (< Iovis), Chipiona (Servilius Caepio という名前より)、Port Vendres (< Portus Veneris), 等々。また地名がローマ時代にまで遡るものもある : Zaragoza (< Caesara Augusta, これはイ

⁹ 訳注 : Caracalla (在位 : 211-217 A.D.) (188~217 年)

ベリア語の Salduba にとって替わった)、Triana(< Traiana, セビリアの市街地の名前)、また多くの地名がイベリア半島に広がっている：例、Antoñana (< Antoniana), Antoñán, Autuñano, Oreja (< Aurelia), Orbaneja (< Urbanus), Quintillán (< Quintillianus), Oviñana (< Albiniana), Orejo (< Aurelius), Semproniana, Albiñana, Marcén (< Martius), Leciñena (< Licinius)等々。ローマ人の名前は北部地方に特に多く見られる、例えば Huesca, この市街地の名称 (lat.Osca) は、R. Menéndez Pidal によると、設立者がサムニタ (osco) を起源としている (他の学者が言うように、Bolscan よりも古いものではないかもしれない)。

5.

イスパニア人は早い時期からローマ帝国の最高位の行政官を占めるようになった；属領の最初の執政官は、まさに Gades 出身のイスパニア人の Balbo であった。またイスパニアから 5 人の皇帝を輩出している、Galba, Trajano, Adriano, Máximo と Teodosio である。また著述家、詩人としてラテン文化に貢献する人も出た：例えば二人の Séneca、Lucano(3 名ともに Córdoba 出身)、Marcial (Calatuyud の Bíbilis 出身)、Quintiliano(Calahorra の Calagurris 出身)、Pomponia Mela(Tingentera 出身)、Columela(Cádiz の Gades 出身)がいる。

6.

ローマ時代にイスパニアにキリスト教が浸透した、そしてこのイベリア半島は、(紀元後の数世紀ですでに) 最もキリスト教が普及した地域の一つであった。イスパニア出身の皇帝 Teodosio(Coca 出身)は、キリスト教をローマ帝国の国教と定め、異教の崇拝を禁じたという事実は、意味深いところである。イスパニアは一連の殉教者を生み出すキリスト教化運動に重大な役割を果たしていた (特に Diocleciano による迫害が行われていた時期)、また聖者となったものもいた、例えば S. Eulalia, S. Emeterio, S. Tirso, S. Fructuoso, S.

Celedonio, S. Facundo, S. Víctor, S. Justo, S. Félix などがいる。これらの聖者の名前は幾つかの地名に残っている。またさらにキリスト教にかんして言えば、4世紀に高名な詩人、Juvenco と Prudencio が、また教会について言えば、法王、S. Dámaso がいる。

キリスト教の影響について言えば、ラテン語は（宗教的な布教に必要であるので）は活発に使用され、活性化し、民衆のものとなっていった、そして非ローマの住民の間にもキリスト教はより深く浸透することになり、普遍化し、民衆を大いに統合することになる。しかしながら、古典ラテン語とか公式および統治用のラテン語という言語面については、ラテン語が均一に浸透していたということはない（4世紀のイスパニアの修道女 *Eteria* は、教養がないとはいえないが、その著 *Peregrinatio ad loca santa* の中にロマンス語に保存されていた民衆的形式、言い回しを使用している、例えば *tenere consuetudinem, subire montem, plecaremus, absolvere, cata, de-intro, colliget, sursum, cum+*対格、等々が見られる。キリスト教に関することと言えば、本来ギリシャ語のより広い意味ではなく、現代まで保持されているテクニカルな意味で採用されている。次のようなギリシャ語より取られたものがある：例、*angelus* (gr. “伝達する人”)、*martyr* (“証人”)、*asceta*[修行者] (“競技者”)、*avangelium, apostolus, diabolus, ecclesia, basilica, episcopus, diaconus, catechumenus, eremita, baptizare, monasterium, coemeterium, parabola, parabolare, talentum*。意味の変化がキリスト教によるものがある、例えば、*paganus* – “平民、市民” → *pagano* “異教徒”、また *talentum* – 金銭、重量 → “生まれながらの才能、知性”；意味の拡張、例：*parabola* > *palabra*；特殊化の例、*verbum* (gr. *lógos* の翻訳した語)、またキリスト教のメンタリティーが新しい副詞的表現となるもの、*bona mente, sana mente*。

7.

イスパニアのラテン語の特性に関して言えば、われわれが有している情報はそれほど多くはない。一般に文書に残っているものよりも、同じイスパニアのロマンス諸語から、また他のネオ・ラテン諸所との比較から導き出される特有性について結論づけられることになる。

ある種の一般的で外的な特有性、“トーン”、地方色ある“アクセント”、また文体的な特徴は、イスパニアのラテン語でかなり早い時期に見られるのは、間違いない。キケロによるとコルドバの詩人のラテン語は、“ある種重厚さがあり、奇妙なものである”(pinque quiddam atque peregrinum) と述べている。また Aulo Gelio は、イスパニアの修辞学者の Antonio Juliano は、“イスパニア風のアクセントをもって”(hispano ore) 話している、と述べている。Espartiano は、Adriano がいまだ「義捐金募集人」(cuestor)であった時に、元老院の人が“田舎風の発音”で発言しているのを嘲笑している(“... cum orationem imperatoris in senatu agrestius pronuntians risus esset ...”)と述べている。しかしながらこれらは、あまりにも一般的な観察であると言える。

Carnoy (*Le latin d'Espagne d'après les inscriptions*, 2a. ed. Bruselas, 1906)による碑文の研究によっても、これらのことについて多くを語っていない。一般的にこの書の中に“俗的用法”としては少ししか言及されていない(ルシタニアの碑文に若干多くの俗的用法があると記されている)、またここで言及されている多くの例では、特にイスパニアに特化されてはおらず、一般的なロマンス諸語(例えばイタリア、ガリア、アフリカに特有な)俗的用法を論じている。またこれに加えて、これらの俗的用法は、後日スペイン語に取り入れられたものとは逆の発展的方向を示していた。例えば、f > h, ct > xt > it という変化の痕跡、変化についての指摘はない。それに反して、

v > b(*vivit* の代わりに *bibit*)と変化する所謂”betacismo”とか、イタリア、ガリアの碑文に見える現象、また子音間にある無声閉鎖音、また母音と流音(*liquida*)の間にある無声閉鎖音の有声化 (*immutavit* の代わりに *imudavit*, *sacerdotes* の代わりに *sagerdotes*, *perpetuo* の代わりに *perpeduo*, また逆の *Peregrinus* の代わりに *Perecrinus*, *Augustinus* の代わりに *Aucustinus*)が残っている。また一連の特有な語が記録されている、このうちの幾つかはラテン語であり、他の語は前ローマの語と考えられているものがある ; *alis* (*alius* > *ant.esp.al-* “他のあるもの”、*paramus*, *tam magnus* > *esp. tamaño*, *caballus*, *mancipius* > *esp. mancebo*, *socra* (第4曲用の女性名詞 *socrus* の代わりに) > *esp. suegra*, *lausia* > *losa*, *collacteus* > *collazo*, *natus-*“子供”、*natalos-*“祖先の”、*mulier-*“uxor”, *superum* 前置詞として(> *esp. sobre*), *altarum* > *esp. otero*.

Plinio¹⁰, Columela, Pomponio Mela は、特に技術用語 (植物、動物、鉱物の名前)である一連のイスパニアの民衆語を記録に残している。これらは一般的にスペイン語には保存されていないが、ラテン語に採用されたことによって、伝統的なラテン語の語彙要素として保存されたのである。イスパニア風用法(*hispanismos*)として多くの語が記録されている (しばしば間違ったイスパニア風用法であり、これは単に一般的な“俗的用法”また他のロマンス諸語に保存されている語である)、また San Isidoro de Sevilla(6世紀)の語源論(*Etymologiae*)に記載されている。この本では、ギリシャ語法、ケルト語法、イベリア語法、ラテン語の単語であるがイスパニア風の特有な意味を持った語、またゲルマン語法などを取り上げている : *thius* < *esp. tío*, *Symphonia* [音楽の楽器の名前として] (> *zampona*), *capanna* > *cabaña*, *cattus* > *gato*, *camisia*, *plagia* > *playa*, *antenatus* > *alnado*, *cantenatum* > *candado*, *argenteus-* [“白い” という意味で] (cf. *Esp. arienzo*), *malleolus*

¹⁰ 訳注 : プリニウス(Plinius 23 頃~79)学者であり将軍、ベスビオス火山の噴火を視察中に有毒ガスで窒息死したとされている。

> majuelo, mantum > manto, merendare > merendar, serralia または sarralia > cerraia, armilauca, blavus- “青い”、burgus, saio > sayón, flasca, hosa, medus, 等々。(cf. J. Sofor, *Lateinisches und Romanisches aus den “Etymologiae” des Isidorus von Sevilla*, Göttingen, 1930) .

8.

しかし、既に述べたように、これらの情報では不十分である。それでイスパニアのラテン語 (“俗” ラテン語) の特性をより幅広く知るためには、スペイン語とラテン語の間、また一方スペイン語と他のロマンス諸語の間での言語学的比較によって帰納させる必要がある。これらの特徴は、主要な4つのタイプに分類することができる: 古語、保存、方言、革新 (arcaísmos, conservaciones, dialectismos, innovaciones) の4つである。

a) 古語(arcaísmos)。

イスパニアは、この地方のローマ化の初期の頃 (紀元前3世紀末より紀元前2世紀の初頭まで) に前古典ラテン語(preclásicos)、つまりキケロとかアウグスティヌス等による古典ラテン語という視点より見た時の “古語” 要素を受け入れ、保存した。それでアメリカのスペイン語では現在までイスパニアのスペイン語は既に失った要素を保存している: esp. cueva “洞窟”, port. cova は、古典ラテン語の cava 以前のラテン語古語である cova が引き続き使われている例である。また同じく、esp. cuyo, port. cujo は、古語ラテン語の比較-所有格の形容詞(adjetivo posesivo-relativo)の cuius, cuia, cuium を継続して使い、一方古典ラテン語では、(cuius, ジェンダーによる変異形なしで) 比較代名詞の所有格に取って替わられた (これは Virgilio の時代まで見られる) このような形容詞は、(イスパニア以前にローマ化された地域である)サルディニアでも保存されている。

保存。

このカテゴリーの中には、前記の古語とある意味で類似の諸単語

が含まれることになる、しかしながらこれは文学的ラテン語に関してということではなく、“俗”ラテン語に関してということである。ローマ帝国時代口語ラテン語にも革新（形式）が引き続き発生していた、しかしこれらの革新形式がローマ帝国全土に拡散していたわけではなく、また辺境の地とか隔離された地域に到達することはなかった、これらの地域では、この革新形式以前の語形を保存していた。それでイスパニアのラテン語は、一保存された形式に関して言えば— サルディニア、イタリア南部、シシリア、アルプス地区、ダルマシア、ダシア、およびすべての隔離・辺境地区と一連の合致する語形を示している。これらの地方では、ガリアとかイタリア中央・北部で受け入れられた多くの新語を無視している。それで、例えばイスパニアに特徴的な保存形が見られる：*metus* > *esp. miedo* (cf. これに対し、*ital. paura*, *fr. peur* < *pavor*), *tam-magnus* > *esp. tamaño*, *petere* > *pedir* (cf. *también*, *rum. a petí*), *fabulare* (cl. *Fabulari*) > *esp. hablar*, *port. falar* (これに対し、*ital. parlare*, *fr. parler* は、より新しい語形 *parabolare* を使用している; *fabulare* は隔離された場所であるサルディニアに残っている：また *sard. faeddare*, および辺境で隔離された地域である *Recia*, *ret. favler* がある); *formosus* > *esp. hermoso*, *port. formoso*, cf. *Rum. frumos* (ガリア、イタリア、これに対して革新形である *bellus* > *fr. beau*, *ital. bello* が広がった); *passerem* “雀” → “鳥” > *pájaro*, *port. páxaro*, *rum. pasăre* (一方ガリア、イタリア、およびサルディニアでは、**avicellus* > *fr. oiseau*, *ital. uccello*, *cat. ocello* が広がった); *reus*-“罪のある” → “犯罪、悪い” > *esp. reo* (*rum. rău*, 一方イタリアでは、*captivus* > *cattivo*, cf. *Fr. chétif*); **afilare* (“husmear”, 狩猟の用語が古典語に取って代わった、 *invenire*-“encontrar”) > *esp. hallar*, *port. achar* (cf. また *rum. a aflá*, *dalm. aflar*), 一方イタリア、ガリアには次のものがある、*trovare* また *trouver* < *tropare* また *turbare* (*aquam*); *plicare* > *esp. llegar*, *port. chegar* (cf. *Rum. a plecá*- “partir”, またイタリア、ガリアでは、**adripare* > *ital. arrivare*, *fr. arriver.*)

イスパニアがダシア等の遠隔の地と共通している保存している語形

の等言線は、たいへんに興味あり、数も多い。これについて次の表に示すことができる（大文字はラテン語を小文字はロマンス語語形を示すことにする）：

<u>HISPANIA</u>	<u>GALLIA-ITALIA</u>	<u>DACIA</u>
Conservaciones laterales	Innovaciones centrales	Conservaciones laterales
OBLITARE esp. olvidar	DEMENTICARE ital. dimenticare	OBLIGARE rum. a uitá
LUCIFERUS esp. lucero	STELLA MATUTINA ital. stella mattutina	LUCIFERUS rum. luceafăr
TUNC esp. entonces	ILLA HORA ital.allora, fr. alors	TUNC rum. atunci
CUBITUS esp. codo	GUBITUS ital. gomito	CUBITUS rum. cot
SOCRA esp. suegra	SOCERA ital. suocera	SOCRA rum. soacră
EQUA esp. frío	CABALIA ital. freddo, fr. froid	EQUA rum. frig
OVIS esp. oveja	PECUS, pl. PECORA ital. pecora	OVIS rum. oaie
PUTRESCERE	MARCESCERE	PUTRESCERE

esp. podrir	ital. marcire	rum. a putrezi
CASEUS esp. Queso	FORMATICUS ital. formaggio, fr.formage	CASEUS rum. caş
DIES esp. día	DIURNUS ital. giorno, fr. jour	DIES rum. zi
HUMERUS esp. hombro	SPATULA ital.spalla, fr. épaule	HEMERUS rum. umăr
MULIER esp. mujer	FEMINA, DOMINA fr. femme, ital. donna	MULIER rum. muiere
FERVERE esp. hervir	BULLIRE ital.bollire, fr. bouillir	FERVERE rum. a fierbe
MENSA esp. mesa	TABULA ital.tavola, fr. table	MENSA rum. masă
LATRARE esp.ladrar	BAUBARE ital. abbaire, fr. aboyer	LATRARE rum. a lătra
ARENA esp. arena	SABULUM ital. sabbia, fr. sable	ARENA rum. arină

oblitare, cubitus の場合には、ガリアではより古い形式を保存している、これはイタリアは、ローマ時代にはガリアよりもより革新的であり、caseus, latrare, mulier という形式は、イタリアに残っているが、意味が変わり限定されたものである、ことが観察される。

類似の保存形式は、文法体系にも見られる：それで、イスパニアのラテン語は、比較形を *magis* > *esp. más, port. mais* (cf. *rum. mai*)で作っている、一方イタリア語、フランス語では、より新しい形式である *plus* > *it. piú, fr. plus* で比較級を作っている。またイスパニアでは、ラテン語の形式 (*hic-iste-ille*) とは同じではないが、少なくとも概念としては、3つの指示代名詞の区別を保持している (*éste - ése - aquél* < *iste - ipse - *eccum ille*)。直説法大過去(*pluscuamperfecto de indicativo*)を残している：*amaveram, canteveram* > *amara, cantara*, この語形は後に間接法不完了形となる (同じような形式は、ポルトガル語、カタルーニャ語、プロヴァンス語、南部イタリア語で保存されている)。また不安定ではなるが、接続法未来形を保存している：*cantavero, amavero* > *esp. cantare, amare; port. cantar, amar*, また同じくマケドニア-ルーマニア (*cîntare*) とかダルマチア語 (*kanturo-*不完了未来形として) で残存している。またイスパニアのラテン語では基数での 10 を示す語尾の *-aginta* に古典語のアクセントを保存している (*sexagínta, septuagínta* > *sessaeínta, setaeínta* > *sesenta, setenta*), 一方他の西方ロマニア (*Romania occidental*) の言語では、*-áginta* とアクセントをつけている (それで、*fr. soixante, ital. sesanta* の語形を説明できる)。またこれまで見たように、イベリアの文法体系で他の辺境の地域、特に東方のロマンス語に残る語形と合致しているものがある。この後者の地域との合致形式に関していえば、既に示したものに加えて、指示形の語形成 (代名詞、および副詞) で合致している：**accu/ecce: esp. aquél, aquí; rum. acél, ací*, また疑問代名詞の対格 *quem* の保存、*esp. quién, port. quem, rum. cine*.

しかしながら、イベリア半島のロマンス語と、ローマ時代に起源を有していない別のロマンス諸語との間には、合致形式もあれば、対立する形式もある。つまり、これはイスパニアのラテン語の特有性に帰すことは出来ないのということである。合致形式は類推傾向によることもあれば、また対立形式は、イスパニアにもたらされた

革新形式が他の地域では排除されたという事実によるものかもしれない。それで、*frater* の替わりの *germanus* (esp. *hermano*, port. *irmão*, catal. *germà*) は、中世にほとんどのイタリア中で使用された革新形式である、しかしこれはすぐに、より古い形式である *frater* (> fr. *frère*, rum. *frate*) より派生した *fratello* < *fratellus* によって排除された。同じように、(*velle* の規則化され規範化した形式である) *volere* に替わって、logud. *kérrere* と合致する革新形式、*quaerere* > esp. *querer* がスペインとポルトガルで使用されるようになるが、フランス、イタリア、カタルーニャでは、より古い形式によって排除された (fr. *vouloir*, ital. *volere*, cat. *voler*)。

(言語地理学の視点より) ロマンズ諸語の特性に関して、Matteo Bartoli は、‘ローマ時代の革新形式は、イタリアにおいて他の地域おりもずっと多く見られる、またイベリア半島では他の地域よりも革新形式がずっと少ない’；また ‘フランス、プロバンス、スペイン、ルーマニアではローマ時代の革新形式は、ロマンス語時代よりもずっと少ない’、また ‘基層語の単語は、上層語よりもずっとすくない’、と述べている。このような特徴があることから、イスパニアのラテン語は、**著しく保守的**であると考えなければならない。しかしながら、無論このことはイベリアがローマ帝国からすれば境界の位置にあるばかりではなく、イタリアまたガリアで生まれた革新形式がこの境界の地域には達しなかったという単純な事実によると解してはならない。革新語形に対する抵抗は、特有の保守的な心情、明らかな伝統的精神、固有の文化的優越性という意識、また言語的個別性等によるものであろう。このことによってローマ化されたイスパニアは、早い時期よりローマ帝国のほかの地域、またイタリアそのものまたローマに対立していたということである。

イタリアの方言(Dialectismo itálicos)

ローマ化された地域に拡散した口語ラテン語には、入植民が方言ラテン語が話されていた地方から来たという事実によって、必然的

に方言的形式が見られることになる。入植した人は民族的にはイタリアック（オスコ・ウンブリア）または非イタリアックの人であった。実際に、イスパニアのラテン語には、純粹のラテン語形式の語を排除して、（イタリアック系の）方言形式が見られる。それで *esp. nudo, octubre, cierz* は、オスク語の *nūdus, octūber*（これは119年の Pamplona の碑文に見える）、*cērciu* に対応していて、ラテン語の *nōdus, octōber, cīrcius* (cf. *cat. nu, uytubre, port. outubro*) には対応していない。音声組織の発展について言えば、多くの学者（特に、R. Menéndez Pidal）によって、*mb, nd* の子音グループの閉鎖音が鼻音に同化するのはいタリア系の人々が植民したことによると考えられている：

例、*mb > m* (*lumbu > lomo, palumba > paloma, columba > cat. coloma*：この現象は、カスティーリャ語、アラゴン語、カタルーニャ語、ガスコーニュ語でも観察される)、および *nd > n* (cf. *demandare > cat. demanar*；この現象は、カタルーニャ語、ガスコーニュ語にまたアラゴン語に見られる)。また *ld > ll, l* という同化（カスティーリャ、アラゴン、レオンで中世期に頻繁に起きた）、またアラゴン語で特徴的な現象である鼻音また流音後の無声閉鎖音 *p, t, k* の有声化 (cf. *arag. cambo, fuande – campo, fuente*)、またこれらはバスク語が基層語、傍層語として影響している、と説明されることがある。事実これらの3つの同化は昔のオスコ・ウンブリア方言を特徴付けている、また現在もイタリア中央・南部の方言、基層となったオスコ・ウンブリア語に特徴的な現象である。*p, t, k* の有声音化は、古代ウンブリア語でも記録に残り、また現在もイタリア中央部の方言でも見ることができる。しかしながら、他の学者は多くの他のことばでもこの同化が現在も起きている (cf. *riopl. también > tamién*) し、また単なる生理的音声学によって説明することができる (cf. 例えば最近のものでは、R. Menéndez Pidal の “Orígenes del Español” の書評をしている André Martinet の *Word*, VIII, 2, pp.184-188)。しかしながら、これらの現象は、オスコ・ウンブリア人が昔住んでいた地域である中央・南部イタリアにも見られるという事実は意味深いものである。

イベリア半島のもこの同化現象がピレネー山脈地域に残っている、これは少なくとも、イタリア人が植民した地域、Ilerda(Lérida)また Osca (Huesca; これは Sertorio の首都であり、サルビヌ人(sabino)であった)などが拡散の中心地であったのかもしれない。

革新。

スペイン語が他のロマンス語に対して特徴づけられる革新形式の幾つかは、ローマ時代にまで遡るものであろう。そのうちの最も重要なものは、形態的組織での革新である。例えば第 3 曲用 (-ēre) の排除、つまりこれに属する動詞は第 2、第 4 曲用へと変わり、-ēre, -ire へとなり (facēre > hacer, vivēre > vivir, scribēre > escribir)、4 つの曲用は 3 つへと縮小することになる。語彙に関してもローマ時代に少なからず革新があった。最も古いものをあげてみると (このうちの幾つかは、Plinio とか San Isidoro によって取り上げられている): formaceus > hormazo, argenteus “白い” > arienzo, bostar (“establo de bueyes”), colomellus- “diente canino” > colmillo, serralia- “lechuga silvestre” > cerraia (port. serralha, cat. serralla), captare (oculis) > cattare > catar (“ver, mirar”), amarus (variedad de verde) > amarillo, **perna** > **pierna**; 派生語 *corationem > corazón, *capitia > cabeza, 合成語 pedis ungula > pezuña, faciem ferire > zaherir。ある種の革新語形は、イスパニアでは、他の東方地域のものと合致している、ガリア (cf. cuprum > esp. cobre, fr. cuivre, 一方イタリア、ダシヤでは aeramēn > it. rame, rum. aramă) またイタリア (cf. thius > esp. tío, ital. zio, 一方ガリア、ダシヤではラテン語を保存し、lat. avunculus > fr. oncle, rum. unchiu) で合致しているものがある。

。 。 。

9.

これまで特徴づけたイスパニアのラテン語は、疑いもなくかなり

均一的なものであり、そのようなものとなった。それで学者によると (Walter von Wartburg)、10 世紀ころまではイスパニアのロマンス語はそのようなものとして保持されていた。しかしこのことは、スペイン語に現行の分岐現象とか、地方的差異はない、ということではない、それらのうちの幾つかは、ローマ化の初期のころから既に存在していたものである。このような差異は、さまざまな基層語、ローマの統治上の地域区分、教区の区分、植民地化の時期の違い、またはローマ化のルートの違いなどに帰せられることがある。さて、イベリア半島のロマンス諸語の異化を理解するためには、まず最初に半島のローマ統治上の区分を思い起こす必要がある、この統治上の区分は、恣意的なものではなく、多くの部分で土着（基層）民の区分に合致し、教区の区分によってそのまま保持された。またこれが、ローマ化の流れの方向性と到達点に関連することになる。

イベリア半島の征服後すぐに、イスパニアは2つの属領に区分された、1つは *Hispania Citerior*(半島の北東部)ともう1つは *Hispania Ulterior*(半島の南西部)である。その後、紀元前 27 年、Agripa¹¹は2つの属領を3つに分ける。彼は *Hispania Citerior* を *Tarraconensis* として存続させ、*Hispania Ulterior* を *Baetica*(南部)と *Lusitania*(西部)とに分ける。そしてすぐに Caracalla¹²は、*Tarraconense* の北西部を分

¹¹ 訳注 : Agripa. Marco Vipsanio : Nacionalidad: Roma : 63 a.C. - 12 a.C.

¹² 訳注 : "The infamous Caracalla (A.D. 188-217) was the emperor who extended Roman citizenship to all freemen in the empire—largely, it is held, to raise taxes for such projects as his wildly popular bath. In the many years of its greatness, the complex must have been staggering both in size and opulence: it originally accommodated some 1,600 bathers as well as other activities such as sports and theatricals. The underground vaulted facilities for servicing the calidarium (hot baths) and tepidarium (lukewarm baths) were incredibly complex. In semiruin today, the bath remains impressive, especially on summer evenings, when it is used for staging opera.

離し、Gallaecia-Astúrica を作り新しい属領とする。また Diocleciano¹³ は、Tarraconense はイベリア半島の中央部を分離し、Carthaginensis を作る（これによって、Baleárica を含めて5つの属領(provinvias)が、ガリア県に依存する Hispania 教区を形成することになる）。

しかしながら、ローマによる植民地化は、イスパニア各地では同一ではなかったことは承知している、つまり Hispania Ulterior 特に Bética では、植民地化は社会的にも文化的にも非常に進んでおり、都市化され母国風に植民地化されたところである。一方 Hispania Citerior、特に Tarraconense での植民地化はより、民衆的であり、軍人、植民、商人による植民地化であった。それゆえ、Hispania Ulterior のラテン語はより教養高いものであり、より保守的なものであった、一方 Hispania Citerior は、より民衆的であり革新的であった。さて、イベリア半島の東部 (Lusitania, Galicia, Asturias, また Evora, Emérita, Bracara, Astúrica 等の都市を含めて) は、Bética よりつまり Guadalquivir の溪谷の北西および北部へと進むローマ化の流れに沿ってローマ化された。一方中央・北東部 (Cataluña, Aragón, Burgos 地区) は、Tarraconense によってローマ化された、言い換えれば出身地によってより教養ある、または民衆的なラテン語を採用しながら、Ebro 溪谷に沿うローマ化の流れによってラテン語が普及していくことになる。更に、Hispania Citerior は、イタリア、ガリアと恒常的な関係を保っていたので、その地のラテン語は常に革新形式に対して門戸を開いていた。一方 Hispania Ulterior は、ローマとの紐帯が弱化し始めると、かなり孤立した地域となりこの地のラテン語は、保守的な性格を保持することになる。gallego-portugués (Hispania Ulterior のラテン語の継続した言語)と、スペイン語とカタ

"http://www.greatbuildings.com/buildings/Thermae_of_Caracalla.html

¹³ 訳注 : Diocleciano. Cayo Valerio Aurelio : Nacionalidad: Roma : 245 - 313

ルーニャ語 (Hispania Citerior の継続した言語) との間に古くからある違いは、このような状況の違いによるものであろう。後日、Tarraconense が、イベリア半島の他の地域よりもガリア、イタリアと頻繁で緊密な関係を持っていたがこの関係が縮小されると、新しい革新形式を獲得することになる。このようなことがあるので、カタルーニャ語 (一部アラゴンに、この Tarraconense が縮小したラテン語の継続形) から Bética, Lusitania, Gallaecia-Astúrica, Carthaginensis のラテン語継続形を保持している luso-español¹⁴を区別するような古い時代の等源線(isoglosas)が存在することになる。それで例えば、カタルーニャ語とかアラゴン語では、-enta (< agínta)ではなく、-anta (< áginta)、cf. cata. Sixanta 等が見られ、また複数形で、所有形容代名詞の suus が ille の複数所有格に替わる illorum (> cat. llur, arag. lor) ことになる。そしてカタルーニャ語では特にラテン語の第3曲用が排除され (cf. cat. pendre, retre, これに対して esp. prender, rendir)、またガリアとかイタリアと多くの語彙的に合致しているものが見られ、スペイン語とかポルトガル語に対立することになる: menjar (comer), parlar (hablar), trobar (hallar), voler (querer), taula (mesa), cosí (primo), donar (dar), cercar (buscar), ociure (matar), etc. しかしカタルーニャ語の言語的地位に関しては、この語彙的な面でもより詳細な研究が必要であるが、これらの差異とか対立のあるものは、実際にローマの時代にまで遡るものであろうが、またあるものはカタルーニャ (バルセロナ伯爵領) がカロリング朝に依存していた中世期に出現したものもある。これと同じように、初期のカンタブリア・カスティーリャ(Castilla cantábrica)とブルゴス(Burgos)の間の最も古い時期の差異は、Caracalla の分割によって Cantabria は Gallaecia-Astúrica へ属することになり、ブルゴス高地は Tarraconense 領地内に留まり、その後、Diocleciano の分割時期に Cartaginense へ帰属することになる。(既に述べたように、教会は、ローマの統治区分を保

¹⁴ 訳注: luso-español= lusitania-español (ルシタニア・スペイン語)

持した、しかしながら、教区の境界線によってのみ説明できる言語的前線というものもある。それで政治的にはポルトガルに所属する Miranda del Duero [Miranda do Douro]^{訳注}では、現在にいたるもなおレオン語を話している、これは多分中世期を通してこの地域は、Astorga 教区に属していたからであろう。

Harri Meier – 最近ではこの問題に最も関心を寄せる学者、(*Beiträge zur sprachlichen Gliederung der Pyrenäenhalbinsel*, Hamburg, 1930; *Die Entstehung der romanischen Sprachen und Nationen*, Frankfurt, a.M., 1941; *A formação da língua portuguesa, en Ensaios da Filologia românica*, Lisboa, 1948, pp.5-30) は、ローマの統治上の区分とか、ローマ化の潮流を重視している。そしてこのことは植民地人のさまざまな所から来たという出身地の違い、つまりイタリア内のラテン語の方言的違いと関連しているとする。また彼は、イベリア半島全体はイタリア中南部のラテン語によってローマ化された、しかし *Bética* は、より南部の教養あるラテン語によって、また *Tarraconense* は、中部地方の田舎風で粗野なラテン語によってローマ化されたと考えている。更に、*Tarraconense* ではローマ化は、軍人、農業植民によって行われたが、一方 *Bética* の植民地化は、北東部の植民地化のプロセスは、より都会風であり根本的なものであった（このことの指標としては、*Tarraconense* では都市名は土着語をしばしば採用しているが、*Bética* では元々の地名に土着語の名称と一緒に古くからのラテン語の名称を持っていた：Segida – Augurina, Ulia – Fidentia, Eborac – Cerealis, Iliberri- Florentini, Ilipula – Laus がある）。*Bética* および *Hispania Ulterior*（ポルトガル語はこのラテン語に対応している）は、一般的に保守的形式を保存しているが、一方 *Hispania Citerior* には、明らかに革新的で進歩的な傾向を見て取れ

^{訳注} Miranda del Duero(Miranda do Douro)の所在地は、49 頁の地図を参照のこと。

る。Bética に入植した植民の出身地とか、その保守的傾向の故にこの地域の保守形式が説明できる。この地域の“俗”ラテン語での語末の o と u の区別 (ポルトガル語には現在までこれが残っている：事実、後から 2 番目の母音 e, u は、ポルトガル語では、ラテン語の音節末の母音は o であれば、開音であり、もしラテン語の母音が u であれば閉音であった：cf. eu desespero – desespero, logo – fogo, novos – novo), また子音グループ mb (cf. palumba > pomba), 古代の二重子音 ai, ei は ei (leite, madeira) となり、および au は ou (pouco, ouro) となる、また不定または単純過去形が広く使用されているし、また人称不定詞 (古代ナポリでも見られる) が広く見られる。これに引き換え、Tarraconense の“俗”ラテン語では、語末の o, u は常に o になる、またスペイン語 (これは初源の俗ラテン語に対応) では、mb は m となり (palumba > paloma, lumbu > lomo), 二重子音の ai, ei, au は縮小した (leche, madera, poco, oro)。また人称不定詞は存在せず、(中央イタリアと同じように) 完了過去または合成過去形が好まれている。

これらのことは非常に蓋然性がある、そしてこれによって示される等言線は古くからあるものであり、イベリア半島のロマンス語を区別する一連の特徴といえる。しかしながら、だからといってイベリアでのロマンス諸語の形成はローマ時代に行われたとか、また言語の差異化がそれ以前の歴史的出来事と関連せずに同一の方向性の中で出現したと考える必要はない。事実、ローマ時代またその後になっても、ラテン語とイベリア半島のロマンス語に存在した差異は、かなり統一性のある言語的単位の地域的側面を示しているし、また中世期に発生した新しい差異を付け加えれば興味深いものとなる。例えば、アクセンのある短母音の e, o の二重母音化とか、また語頭の f の気音化等々の等言線が、他のイベリア半島の他のロマンス諸語から、スペイン語 (むしろカスティーリャ語) の固有領域を示すしている。イベリア半島の言語的前線は、中世期に決定された、

この使用領域の限定を決定づけたのは、レコンキスタ（国土回復戦争）であり、これによってカスティーリャ語の地位が上昇したのである。

。 。 。

10.

イベリア半島の言語史に基本的に重要な出来事は、西ゴート族の侵入であり、この結果としてイスパニアにゴート族の王朝がおこったのである。この出来事の結果として、他のロマニア地域との政治的および文化・言語的にイベリア半島の分離と孤立化、解放をもたらし、またこれまでのローマのイスパニアの言語-文化的中心地（*Tarraconense* と *Bética*）の代わりに新しい中心地（*Toledo*）の周辺が統一化の軸となる。そして最終的には、他の俗ラテン語に対するイスパニア俗(ラテン)語の自立性の意識が徐々に結実することとなる。この西ゴート時代は、ラテン語からロマンス語への転移の時期に合致している。西ゴートによる支配の初期のころの等言線は、若干の特有なものがあつたかもしれないが、“俗ラテン語”という範疇内での地方的なものとは言えないが、この西ゴート時代が終焉を迎えたときには、既に確定しまた解放されたロマンス語体系となっていた、つまり“共通イスパニア語”と呼ぶことのできる言語となっていたのである。

11.

しかし残念ながら、西ゴート時代の“俗”イスパニア語（つまり西ゴート時代に実際に話されていた言語）は、われわれにはほとんど知られていない、それで文献として残っているものには多少術学的なラテン語が使われている。*San Isidoro* のような著述家から推測できる情報は、ほとんど語彙に関することである。それで、この“前ロマンス語”を広範に特性化しようとするれば、すでに検討した“俗ラテン語”とモザラベ・スペイン語との比較を行うことになる。そ

れでモスレム時代の初期にすでに一般化していた現象はこの“前ロマンス語”に帰されている。しかしながら、西ゴート時代にすでに古スペイン語を性格付けている特性というものが確認できるし、またそれは拡散し一般化していたことには間違いない。またこれらの特性は、現代のイベリア半島の東部および西部のロマンス諸語（ポルトガルとカタルーニャ語）を性格付けているし、またアストリア-レオン(asturiano-leonés)方言、ナバラ-アラゴン(navarra-aragonés)方言の性格付けている。つまりこれらの特徴というものは、カステールリャ語が半島に拡張し初源時期の一体性を壊してしまう前の“共通イスパニア語”の一体性という特性である。

この共通イスパニア語では、語頭 f は保持され(filiu > filo), また e, i の前の G (硬口蓋摩擦音となり : Ž また Y となり、cf. yenesta, yermano)。子音グループ KT, ULT は、-it (-uit) となった、例、nocte > noite, multu > munito; しかしながら、KT の場合には、より古い形式の xt と新しい形式-it が共存していた : noxte (この 2 形式は、モサラベ・スペイン語で見られる)。また並行的に、子音グループ-KS- は、-XS-, -IŠ-: maxilla > maxsel'a > maisel'a (mejilla)。また母音間、および流音前の無声音の有声化などが見られる : 文献には、“間違った”形式が見られる、例えば、pontivicatus, eglesia。グループ LY, C'L は l' (ll) になった : filiu > fil'o (fillo), vetulus > vetlus > veclu > vel'o, oricla > orel'a, oculum > oclu > wel'o (uello); そして NY は n' になる : vinea > viña (viña)。子音グループ KY, DY, TY は、唯一の破擦音 TS となる (calcea > caltsa, virida > bertsa, potionem > potsone)。二重母音 AU と AI は一般に保存され (auru > auro, tauru > tauro, ferrariu > ferrairo), 音節省略(síncope)により発生したもの (cantavi > cantai) または字位転換(metátesis)によるもの (-ariu, -aria > -airo, -aira, cf. ferrairo, carreija; sapiat > saipa)。子音グループ KE, KI (lat. ce, ci) は če, čī とし て保存され (cervum > červo, pacem > pače) た、これらは現代までイタリア語、ルーマニア語に保存されている。

1 2.

同時に、上に示した特性によって定義されたイスパニアの言語学的同一性というものの中に、後日イスパニアのロマンス語の方言的区分を決定する地域的に特徴的な差異化を見ることができる。Tarraconense より二重母音の ai, au が e, o に単音かするという現象が拡散する(*carraira* > *carrera*, *auru* > *oro*)、また mb という子音グループの内の b の同化(asimilación) (**mb** > **m**, *palumba* > *paloma*, *lumbu* > *lomo*)、これらの現象は、Cantabria および Cartaginense の北部にまで到達しているが、一方その他の Cartaginense(首都と地中海沿岸地域)、Bética, Lusitania および Galicia では古い語形を残している、ai, au, mb (cf. port. *carreira*, *ouro*, *pomba*)。

イベリア半島の中央部(所謂、ゴートの首都地帯)より、アクセンのある短母音 E, O の二重母音化が拡散する(o: “俗ラテン語”の視点からのアクセントのある開母音); 種々の異形式を許す二重母音化: *serra* > *sierra*, *siarra*; *porta* > *puerta*, *puorta*, *puarta*; *bonu* > *bueno*, *buono*, *buano*。このような現象は、Tarraconense 東部には到達しなかった。この現象は、Bética を完全に制覇することはなかったし、また Lusitania, Galicia 西部を制覇していない。実際に、カタルーニャ語(すぐに検討するが例があるが) またガリシア-ポルトガル語では、アクセンのある短母音(開音)の e, o はそのまま保存した; cat. *bó*, port. *bom*。中央部ではこれらの2つの母音は yod(子音的 i)の前でまた、l' という硬口蓋音の前で二重母音化する、またこの二重母音化は Astúrica (Asturias と León) と Tarraconense 西部(Cataluña)に拡散した。一方 Cantabria(Castilla)では受け入れられなかった: cf. *podiu* > *poyo*, leon.arag. *pueyo*; *oc'lu* > cast. *ojo*, leon. arag. *gueyo*, *guel'o*, cat. *ull* (カスティーリャ語に反してカタルーニャ語は、yod または口蓋音の前でのみ二重母音化した、そしてすぐに二重母音は、i, u へと短縮した: *folia* > *fulla*, *lectu* > *llit*)。この同じ地域に、二重子音

と語頭の L の口蓋音化が拡散した(cf. leon. llobu, lluna, llengua; catal. llop, lluna, llengua < lat. lupu, luna, lingua)、これらは Cantabria にまでは到達しなかった(cf. cast. lobo, luna, lengua)。

1 3.

初期のころのイスパニアのロマンス語を特徴つける現象の内の幾つかは、“俗ラテン語”にすべて、またはほとんどすべて帰属させることができる(GE, GI > YE, YI; CE, CI > ĆE, ĆI; LY, NY > L', N')、また別の特徴は、西方ロマニアに帰属している(母音間の無声音の有声化、および KT, KS > Xt, KS > IT, IS)。またあるものはイスパニアに特有なものもある(二重子音化、語頭 l の口蓋音化)またスペイン語に特有なものとして(すべての位置で é, ó の二重母音化、また一方フランス語、イタリア語では開音節でのみ二重母音化する)。しかしこれらの後半の現象は、一般的なものではなく、カスティーリャ語では起らない、例えば、L > LL とならない。é, ó の二重母音化というその後のカスティーリャ語に現われる形式はまだ出現しておらず、語頭の f の気音化、L' (L' > Ž, 例、fil'o > hižo)、また -it の口蓋音化(-it > č, 例、noite > noche)というようなカスティーリャ語特有の現象は、どれも文献には現われていない。このことは、カスティーリャ語の地位が上昇し拡散する前のあらゆるイスパニア語としての特徴的なパラダイム(paradigmas)は、以下の比較より推測できるように、このカスティーリャ語の方言としての固有性を決定するものとは異なっていたと言える：

<u>共通イスパニア語</u>	<u>カスティーリャ語</u>
filo	hilo
fil'o	hijo
ol'o	ojo
viel'o	viejo (*vejo)
noxte, noite	noche
+auro	oro

+carraira	carrera
+palomba	paloma
+pueyo	poyo
+bueno, buano, buono	bueno
+sierra, siarra	sierra
+lluna	luna

+が付いているパラダイム（及びその関連する現象）は、非常に広範囲な等言線を構成している、しかしながら、一般的なものではない。つまり進行中の革新形式であり、イベリア半島全体で採用されたわけではない(pueyo, bueno-bueno-buano-buono, sierra-siarra, lluna)。また拡散した革新形式に影響された保存形式の現象というものもある(auto > oro, carraira > carrera, palomba > paloma)。カスティーリャ語は、共通スペイン語に対して、他の場所で現われたある革新形式を取り入れ(au > o, ai > e, mb>m)、また交替形式の中から1つを選択し(bueno, sierra),またある場合にはもっと古い形式を、つまりある種の革新形式を受け入れずに(pueyo, lluna ではなく poyo, luna)保存し、また独自に革新形式を作る(語頭 f > h, -it > č, etc.)ことによって、その独自性を作り出すことになる。多分西ゴート時代には、カンタブリアのごく限られた地域に、典型的なカスティーリャ語の革新形式が見られる。しかしながらこれは単に地方的方言ということではなく、カスティーリャの政治的拡大に伴って拡散し、これによってイベリア半島の中央部及び南部にまで Tarraconensis, をガリシアとルシタニアに統一する等言線をもっていた共通スペイン語という初源の統一体を壊すことになるのである。

。 。 。

14.

古い時代のスペインでの口語ラテン語が、イベリア半島のネ

オ・ラテン語諸方言の基盤となり、また3つの共通・文学語となる3つの方言体系（つまりスペイン語、ガリシア・ポルトガル語、カタルーニャ語）として定義でき、また限定される言葉の基礎となるのである。しかしこれらの言語は、口語ラテンからできたのではなく、またこの口語ラテン語からの派生は、線状的なものではなく、極度に複雑なものがある。

しかしながら、歴史文法が基本的に仮定しているのは、ある地域のある形式は途切れのない伝統的な形式であるということであり、この科学が前提としている事前の仕事としては、言語発展の過程の中で途切れのない伝統的な、通常“民衆的”と考えられるような形式を観察するために、“引き継がれている語彙” (léxico heredado) と “獲得した語彙” を区別することである。しかしこの仮定は、必要なことであるが極端な抽象化であり、言語で見られる運動（変化）の現実を反映しているとはとても言えない。言語は抽象化されたものにすぎず、所謂“引き継がれている語彙”とは、抽象化された言語の基礎に築かれた第二の抽象化であると言える。事実、言語的要素の内のほんの少しだけが、言語としての領域のある場所に、中断されることなく保存されていることがある、と言える。それでことばを発する (*lenguaje*) こととは、使用されるごとに新しい言語行為の絶え間のない創造であると言える。またこの言語行為という基礎の上に築かれる抽象化（これこそまさに“言語” (*lengua*) と呼べるものである）は、まったく移ろい易い実体である。言語において、ある場所から他のところ、ある方言から別の方言、文学的言語より現行の言語、書記言語から口語言語、共通言語から方言、また技術言語から特殊言語の間には連続性がある。つまり言語の最終的な分析では、ある創造者としての個人から別の個人、ある個人の言語的行為から別の個人への言語行為への移転というものをモデルとするのである。それでわれわれは、現行の言語、つまり現行の抽象的体系を構成する諸要素を考慮に入れてることにより、“引き継がれた

語彙”という表題のもとに以前の体系と現行の体系を比較の基準として（例えば、スペイン語 – イスパニアの“俗”ラテン語）、時間の経過中に生じたすべての現象の効果を現わすものを区別し、これらを収集することになるのである。しかしこの2つの体系の間で1つの単語（“形式”としての単語であり、具体的な単語ではない）が受けるであろう取替え、失敗した変革、また後退をいったもを考慮しない。そして、“引き継がれた語彙”（この同質性について科学的また明確な約定ではないかもしれないが、まったくの幻想である）に対して、次のようなものによって作られた“獲得語彙”というまったく異質のものからなるものが対立するのである：これらには、次のものがある：

- a) “基層語”の要素（言語の比較ということを行う際の最初の体系以前にその同じ地域で話されていた言語の要素；例えばイスパニアのラテン語に対するイベリア語がこれに当たる）。
 - b) “傍層語”の要素（つまり、歴史[文献]に残っている言語が話されていた地域の傍らで話されていた言語の要素；例えばスペイン語に対するポルトガル及びバスク語）
 - c) 方言的要素（つまり、考察されている方言に別の方言から入る要素、または同じ方言の内の共通語形成の途上ではその基礎とはなっていない方言が共通言語へとなる過程、例えば、カステイリャ語内でのレオン語要素、共通スペイン語でのアンダルシア語要素、共通スペイン語が形成された後にこの共通スペイン語に入ってきた *Castilla la Vieja* に特徴的な要素）
 - d) “上層語”の要素（つまり、考察されている言語の上におかれる言語、言い換えれば基層語の上に置かれる言語ということなる。しかしながら、言語の使用によって上に置かれる言語を排除するというのではなく、基層語に吸収されることになる：例としては、イスパニアロマンス語に対するゴート語である）。
- これら“獲得語彙”は、考察されている初期の言語の要素・語形式の資産には属していない、またそれからの派生形でもなく、引き継

がれた要素（更に種々の要素についてのドキュメント・文献に残る情報）の“通常の”発展ではない、ということによってそれと分かるのである。

初源的言語に取り入れられた“基層語”の要素が、“引き継がれた”要素でその後の変容を示すことがある；つまり次のようなものによってこれを認知できる：

- 1) 初源的言語の要素・語形式の資産に属さず、“基層”語の資産に属している（この場合には、既知の言語であることが条件となる）ことにより；
- 2) 言語学的・文献学的に研究された“獲得語彙”のどのようなカテゴリーにも属していないことにより；
- 3) 考察された初源的言語とは異なった音声的・語形成的特徴を示しておらず、これは逆に“基層語”の音声・語形成の特徴に対応していること、この場合には、既知の言語であること。または“基層語”の“親縁語”であると想定される別の言語からの地名であるかもしれないが、この場合には、知られていない言語であること、ということになる。

また、多くの謙虚で率直な言語学者は、“未知の起源”というものお題目に同意することなく、確実に既知の語源が明らかではないほとんどの要素を“基層”に帰している。それで、このように区分されたものの限界は、一般化するれば判然としない、また不安定であり、また恣意的なものと思われることになる。

別の3つのカテゴリーの要素は、考察されている初源言語の資産に属さないことによって、またその言語そのものからの派生形ではなく、その代わりに“傍層語”とか“上層語”に属することによって、また“引き継がれた語彙”を示しているあらゆる“通常の”変容をしめしていないことによって、これらを“獲得された”ものとして認識することができる（これによって、考察されている言語へ入っ

てきた相対的時期を確定するのに役立つし、また少なくとも起点 [“**terminus ante quem**”] とは、それを獲得した後にその言語で生じた変化のみを示すのである)。それで諸言語間または、近縁関係にある諸方言間での変容について (実際に同一のものか、または少なくとも類推を基礎として) 検討するときには、“傍層語”、“上層語”、または調べている異なる諸方言に固有の変容を示しているのかどうかを分けなければならないが、考察されている言語では実証されていない変容であるかもしれない (それで、例としては、*cabo* と *jefe* は両者ともラテン語の *caput* より出来たものであるが、しかし *jefe* < *xefe* は、スペイン語に固有の変化ではなく、限定された位置で起るフランスに固有の変化である $K > \check{S}$ と $P > F$ を示すことによってこれはフランス語起源であると認識できる)。このことは、考察されている言語に入ってきた時期を確定するのに役立つ、つまりそれが ある語形を獲得した終点 [“**terminus post quem**”] ということになる。それでその観察された変容が、“傍層語”とか“上層語”またはそれから出てきた方言で生じた後に、獲得されたものである、ということになる。前の例では、“引き継がれた語彙”の固有の変容の内のあるもののみを示しているということによって、それと判断できる (考察されている言語に取り入れられた後に、起きた変化であると、判断できる)。

無論、上に示した諸カテゴリーにある言語のある要素の純粹に形式的な分類は、歴史的な現実とは合致しない、特に言語と近縁方言との間、また同一言語の2側面間 (例、ポルトガル語-スペイン語、レオン語-カスティーリャ語、古典スペイン語-現代スペイン語) での変容を論ずるときには、合致するものではない。特にある場合に “引き継がれた” 要素が、少ししか、または全然変容していない形式をしめすことがある (例、*lat. flores, sal* > *esp. flores, sal*)、また同じ初期言語から歴史的に獲得した要素というものもある。しかし音声的視点からすると類似の状況といったものもあり、そのようなも

のは、完全に“引き継がれて語彙”に属するものと見えることがある。また次に、起源が同じ言語とか方言において、“獲得された”要素のうちのあるものは、歴史的に考えたときの言語または方言より“引き継がれた語彙”の中にあるものと同じ進展をしていたものがある（例えば、スペイン語の中のポルトガル語用法、イタリア語用法、プロバンス語用法という区分けの出来ないものがあり）。また更に、“獲得された”ある要素が“引き継がれた”形式に同化してしまうような継起的な適用というものが関与することもある。そしてまた、形式に関しては“引き継がれた”単語であるが、意味、または少なくとも意味の一部に関しては“獲得した”ものであるもある（cf. 金属学での *horno*¹⁵[カマド]という単語）。

この同じカテゴリーの中には、概念的干渉というものがあり、これが区分基準となる。それで例えば“基層語”という用語は、考察されている言語の初源的形態以前の言語に適用される（スペイン語の場合には、ラテン語以前のイスパニアに存在した諸言語）が、もっと広い意味で“基層語”として言及されることがある、例えばある方言は、同じ言語の別の方言の“基層語”となることある（それで、カスティーリャ語に対するレオン語、北部イスパニア諸方言に対するモサラベ方言などがこれに当てはめることができる）、また方言とか言語が、同時に別の方言また別の言語の“基層語”、“傍層語”となることがある（カスティーリャ語に対する、また共通スペイン語に対するレオン語、アラゴン語、カタルーニャ語、バスク語の関係がこれに当たる）。方言が共通言語の“基層語”となることがある、また“方言風語法”とか“地方風語法”などが、ある意味で、“基層語の要素”または“傍層語の要素”として考えることが出来るかも知れない。

¹⁵ 訳注：ラテン語 *fūrnus* > *horno* と変化：*fūrnus* の意味は、“パンの焼がま”から抽象的な“カマド、窯”を指すようになる。

借用語とか外国語語法という区分基準を立てると、このカテゴリーは上に示したカテゴリーに関与することがある。事実、民族全体の上にかぶるとか混同・接触、また2言語併用等が前線（“基層語”の場合）、または全領土内（“基層語”と“上層語”の場合）で起きていた場合には、“基層語”、“傍層語”、“上層語”という概念を適用することができる。またこれに対して、特に文化的で突発的な変容の際には、“借用語”、“借入語”などについて云々することができる（例えば、スペイン語でのイタリア語、プロバンス語、英語、ドイツ語要素などについて）。しかしながらこのように設定された区別というものは、2言語併用の限界が別の言語（または方言）に属する唯一つの単語を知る個人であり、それを自身の言語または方言に導入するということであれば、単に程度の違いにしかすぎないのである。ある意味で、イタリア語、プロバンス語等々は、スペイン語の“上層語”を形成する、ということが出来る。この区別は、“基層語”の場合には非常に微妙なものとなる。それで“基層語”の要素を獲得する勝利する言語（今後とも残って行く言語）の視点から見るときのみに、“借用語”について云々することができる。さらに、新しい言語を習得し、固有の言語を捨てる人間という立場に身を置き、学習された言語の中に己の固有の言語の内のある要素を保持していれば（cf. イスパニアのラテン語に保存される“イベリア語”要因の場合、またはカスティーリャ化されたレオン語地域に残るレオン語要素という場合）“保存形式”について云々すべきであろう。

また、“外国風語法”は、己の言語とか民衆的な方言とはことなる“外国の”言語または方言を出自とする要素のすべてということになる。しかしながら、（もし、習得した言語を話す人が、捨て去った言語を話していた人々と民族的にはそのまま継続している、とすれば）このカテゴリーに、“基層語”の要素を入れることができ

ず、また“方言風語法”とか“地域的語法”とすることはできない。しかし基本的には、このカテゴリーの限界は、言語が国民性(nacionalidad)を規定するそのやり方に依存する(例えば、スペイン語にある偶然的なカタルーニャ語を外国語風語法とすべきなのかどうか)のである。そして“外国語風語法”の中に、Fremdwörter(異郷のことば:同化されていない外来のことばであり、自己のナショナルな言語には属していないとの意識されている外来風の語形をもって使われることば)と、Lehnwörter(借りたことば)または本来的“借用語”(すでに同化されしようにされている外国起源のことばであり、ナショナルな言語とはことなる言語を出自としているとの意識なしに使用されていることば)とを区別することが出来る(例えば、ticket, club, picnic, living, boomerang という語彙は、この語形で、また非スペイン語のことばであるという意識されて使用されているが、一方では、おなじことばが tique, clu, pini, livin, bumerán という形式で使われているが、上記のような意識はない)。

15.

これまで、言語学の理論的なものからは余談となるようなことを長々と述べてきたが、これはたんにスペイン語を形成する要素のカテゴリーについての概念を与え、一連のスペイン語の語彙の状況を示すだけではなく、現行のスペイン語を形成し、または“俗ラテン語”から現在まで“中断することない伝統”を有していない要素の間に音声的特性からすると、“引き継がれている語彙”ではなく、“獲得された語彙”に帰することができるものかどうかを示さんとするものであり、またラテン語の要素を多くもっていることをも示そうとした。またこのことばかりではなく、現行のスペイン語語彙の全体を考慮して(いま実際に話されているスペイン語だけではなく、文学的・科学的・行政的・技術的スペイン語の語彙についても考慮して)、“引き継がれた”単語以上に“獲得された”ラテン語の単語が多く見られる(またフランス語、イタリア語というようなネオ・

ラテン語という他の言語より取り入れた単語は考慮しない)。

事実、今日でも少なくとも教養人の間には、ラテン語とスペイン語に間の言語的共通性という意識とか、ラテン語は本来的な“外国風”言語とは考えられないという意識、またラテン語の単語に適応しこれを採用する、またラテン語を基礎として新しい単語を派生させることが可能であるという意識が存続している。このような意識は、過去においてより強いものがあり、また明確であった。何世紀にもわたり、ラテン語とスペイン語は共存してきたので、これらは同一の言語の2つの形式であると考え、ラテン語は“学問的”形式であり、スペイン語は、“俗的”で、民衆的、“毀損された”形式であるとされてきた。このためにラテン語-スペイン語という実際的で広範囲な2言語併用というものがあつた。イスパニアの“俗ラテン語”、口語ラテン語は何世紀間もかけて、進展しロマンス語へと移行することになり、一方学問的ラテン語、またスペイン人の書き言葉としての公式的言語であり公用語は、古典ラテン語、少なくともその理想的なモデルは古典ラテン語であり続けていた言語であつた。また長くにわたり、ラテン語の単語に適応し、これを採用するのがロマンス語を豊かにし、また権威付けるためのほぼ唯一の手段であつた。

ラテン語とロマンス語、“学問的”言語と“俗的”言語、“学的”ラテン語と“大衆的ロマンス語”の間での闘争ではなく協力という対立は、イスパニアのラテン文化のそれぞれの行末を継続して引き継いでいる。文化史に関して言えば、ロマンス語が文学言語また公式言語となる前またはその後においても、活気があり文化が開花した時期、また退潮の時期というものがある。文化の開花した時期として、San Isidoro de Sevilla などにより紀元6世紀が、また San Eulgio¹⁶とか Álvaro de Córdoba などにより紀元9世紀をあげること

¹⁶ 訳注：大司教：Arzobispo(año 800~859)

ができる。この9世紀には、文化の退潮期であり、学校等のあまり普及していなかったため、レオンでは、ラテン語とロマンス語の間での一種の妥協的言語（特に法律に関する書類とか、公共の行事に関する書類等で用いられた）とか、非常に“ロマンス語化された公正証書に使われるラテン語” (*latín notarial muy romanceado*) といったものが見られる。この時期のレオンでの書類には、“俗的”要素ばかりではなく、すでにロマンス語で生起していた変形形式を明らかに示すラテン語の崩れた形式が見られる： *lat. cl.cingitur* の代わりに *cingidur, accebi (accepi), reliosis (religiosis), autairo (altariu < altare), ribolo (rivulus), etc.* 11世紀には、クリュニー派 (*cluniacense*)の改革によってこの妥協的言語は終息し、“正しい”また注意深いラテン語への決然たる回帰というものが記録されている。Silos(1109)修道士は、“正しい” 著作者であり、彼また他の教育を受けた聖職者などは、学校で習った銜学的なラテン語がスペインで使われ始めるのである。その後、特に15世紀になると、カスティーリャ語で書く著述家は、文学的言語のモデルとしてラテン語を採用し、ラテン語の単語とか語法を使うようになる、これに関して *Marqués de Santillana, Enrique de Villena*、特に *Juan de Mena* などをあげることができる。15世紀には、人文学の著作（スペインで最も有名なものとしては、*Vives* とか *Nebrija* をあげることができる）では、銜学的なラテン語を古典ラテン語とかキケロ風ラテン語に取替えることによって、ラテン語の伝統を革新することになる。これによってカスティーリャ語の“再ラテン化”ばかりではなく、同時にラテン語文学を新しいものとするようになる。しかしまた文体の正確さとか純粋性とかを保持するために、ラテン語を使用するのは、牧歌、学問的著作、神学などのジャンルに限定し、ロマンス語に使用は、

Eulogio significa: el que habla bien (Eu = bien, logios = hablar).

Dicen que San Eulogio es la mayor gloria de España en el siglo noveno.

Vivió en la ciudad de Córdoba, que estaba ocupada por los musulmanes o mahometanos.

叙事詩、叙情詩などのジャンルに限られることになる。

文学的言語のラテン語化(*latinización*) (またこのことによって程度の違いということはあるが、現行の言語のラテン語化) という仕事は、誇飾主義(*gongorismo*)¹⁷とか高踏主義(*culteranismo*)、また奇知主義(*conceptismo*)などによって引き続き継続され続けた。そして18、19世紀になると、綴字法を改革するためにアカデミアの権威が介入し、すでに実際の発音では消滅していた音声に対応する文字を書記文字に新たに導入し、書記が発音に影響を与える、ということがあった。それによって新しい綴字で書かれ、発音されるようになる、それで *dino*, *esamen* の代わりに *digno*, *examen* と書かれ、発音されるようになる。*luctuoso*, *fructuoso* などの語から派生した *luto*, *fruto* という語が綴字の上で区別されることがあったり、また *respeto-respecto* などという類語のペアが出現することになる。

16.

スペイン語はラテン語を基礎としているし、またイスパニアで話されていたラテン語の持続したものであり、これはこのラテン語そのものを持続させた現行の形式であるばかりではなく、引き続きラテン語化させている、つまり“ラテン語を出自としている”(この場合のラテン語とは“俗”ラテン語であり、または古典的、学術的、後期ラテン語ということではない)。スペインのこれまでのすべての歴史、特にラテン文化が勃興した時期には、スペイン語にラテン語の単語が入り続けているのである。

ラテン語の単語を分類するとそのカテゴリーは、明らかに“上層”というカテゴリーに属する。しかしながら、この“上層”という概念で、所与の言語に上からかぶさる、また吸収される、または排除

¹⁷ Luis de Góngora 1561-1627 が始めた 16-17 世紀の文学の一派。

された外国語風のことばとして、また初源の言語の学術的形式として理解すべきものである。これらの諸形式は、少なくとも社会的なまた文化的なカテゴリーでは保持されおり、一方で、通常に通用している形式は絶え間なく進展し続け、常用の語形式の豊饒化のための涸れることのない源泉である。このことは特にネオ・ラテン語の場合に言える（特に東方のネオ・ラテン語であるルーマニア語は、異民族に侵略などにより孤立したので、他の言語とは異なる歴史を持つことになる）。これらのネオ・ラテン語は、実際に話すことばとして、発展しお互いに異なるものとするが、一方それぞれ同じ場所で学的また公式的言語としては、各時代の一般的文化状態とか、それを使う人の文化程度などによって多少とも文化的なまた慎重なラテン語であり続けた。（しかしながら古典ギリシャ語と現代ギリシャ語の場合、またインドの印欧諸語の場合にはことなっていない。これらの言語での新語の主要な源泉は、サンスクリット語であった。また特に南西部のスラブ諸語の場合も異なったものではない。スラブ語の新語のモデルとか源泉は長年にわたって、その昔に文化的言語としての威信をえたスラブ方言、および [その起源は、ブルガリアの方言であった] 所謂代スラブ語、または教会古典スラブ語に発展した教会-文化的共通語(koiné eclesiástico-cultural)であった。

ラテン語の単語というものを取り上げて考えて見ると、歴史的な事実としての“引き継がれている”語と“獲得した”語を区別するのは、大変に難しいものである。ロマンス語で既に生起していた変容を継起的に取り入れた、ということもあるが、一方ではある種の単語は、限定された統語的位置で使用されるとか、またより学的であり、より高尚であり、より保守的な言語活動より移転することによって上記の変容が更に影響を受けたこともある。最初の場合に関して言えば、西ゴート時代の後までイスパニアのロマンス語によって獲得されたラテン語風の新語は、その形式の特性によってそのようなものであるとは認知されることがないであろう。それらの新

語は、“民衆的”な要素、または本来的に“引き継がれた”要素と同じ変形を受けたのである。また、第二の場合に関して言えば、そのような区別をするのは難しい、例えばよく使われる *alto* というような単語の移転は、“引き継がれた”要素が示すあらゆる音声的変容を示さず、またこの語が地名で、*Montoto* < *Monte alto* というような語を示したりしているが、継続しながら実現されている。想定できる唯一のことは、この単語は *al* + 子音 > *o* + 子音 (cf. *alteru* > *otro*) の変化がすでに生起していた時に、スペイン語に入ってきたということではなく、ある理由（例えば、教会などのより学的なことばで頻繁に使用されているというような理由）によって、言語的進展過程の中に留まっていたか、またはラテン語形式に再適応したのかもしれない。事実、音声変化の一般性（普遍性）[音声変化の“非例外性” (*inexcepcionalidad*)] は、方法論的に必要な仮説であるに過ぎないということを考慮し、またこれをドグマとしてはならない。言語には、行動と反応、革新と退潮、革新的傾向・環境と保守的傾向・環境の間での恒常的対立という継続的な運動というものがある。革新というものは、常に全言語的分野に影響を及ぼすにいたっていないし（それで、革新が中央から拡散するが、単に怠惰であることにより、またこれに反する傾向などによってある地域にのみ留まることもある）、また変化が立証されている地域で一連の単語全体にまで影響を及ぼさないこともある。それで個々の保守的環境に対する抵抗とかそれに対する反発などが見られることもある。このようなことがあるので、言語の中に“ノーマル”であると考えられるあらゆる変化が生起した単語というものがあり、これらの単語は、比較文法の目的に役立つものであるが、また一方にはある単語だけで変化がおきていたものがあり、これは逆に言語的環境の文化状態について知ることが出来るかもしれない。

17.

明らかに“民衆的”な語とは区別されるスペイン語に“獲得され

た”ラテン語風語法は、2つのカテゴリーに分類される：1つは教養的語法(cultismos)であり、もう1つは半教養的語法(semicultismos)。最初の分類には、(何回かあった再ラテン語化のある時期の)比較的后期のスペイン語に入ってきたり、また学的雰囲気の中で保存され保持されていたことによって、ラテン語形式を変えることなく保存されてきていて、スペイン語の体系に受け入れられるについては必要不可欠なものとして採用された単語が含まれる。これには、動詞曲用の採用、二重子音の単音化、語頭の“不純な”sをes-と変えること、またスペイン語の音素体系(ノーマルな実現体)への適用とかラテン語の“スペイン語の発音”への適用(ge, gi > xe, xi; ce, ci > θe, θi, または se, si, etc)などがある。第2のカテゴリーには、民衆的径路また学的径路の双方を経由して伝えられたもの、または学的形式の影響によって発展過程に留まっていたもの、またラテン語形式に“再適用”されたものなどの要素がこれに含まれる。これらに含まれる語は、所謂“民衆的要素”のうちの特徴的な変化を受けないことによって不完全な音声的進展を示していることになる。

(第3のカテゴリーとして、前記の Fremdwörter と同じように、ラテン語形式を持ちながら、しかしラテン語の単語であるという意識を持たずにスペイン語に採用されたラテン語風の語彙とか表現などを含めるべきであろう：例えば、status, humus, forum, plenum, quorum, syllabus, grooso modo, etc.などがある)。

それで例えば、表面的に適応したものではない語、insigne, espíritu, tribu, voluntad, línea, exhibir, existir, insistir, transmitir, prefacio, etc.が教養的語法である。

また次のようなものが半教養風語法である；espalda (これが“門集的なものであれば、*espaja となっていたであろう)、virgen (*vercen), ángel (*año), siglo (*sejo), apóstol (*abocho), obispo (*besbo), milagro (*mirajo), peligro (*perejo), cabildo (*cabejo), reinar (*reñar),

reino (*reño), iglesia, ánguila, octubre, incluir, percibir, excluir, etc, また *aniquilar* のようなラテン語の中世期の発音を反映している単語もこれに含まれる。また、基本的単語は半教養語または民衆的語であるが、一方ではその派生語が教養語であることもある : cf. *siglo* – *secular*, *virgen* – *virginal*, *iglesia* – *eclesiástico*, *percibir* – *percepción*, *perceptible*, *perceptivo*, *perceptor*; *peligro* – *periclitar*, *ley* – *legal*, *oreja* – *auricular*, *ojo* – *oculista*, *mano* – *manual*, *dedo* – *digital*, *loa* – *laudable*, *laudatorio*; *leche* – *láctico*, etc. (これらの多くの場合には、派生語であるとの意識はなく、ラテン語を知らない話し手にはこのような意識は存在していない)。

更に興味があるのは、教養語と民衆語という単語のペアがあることである (このペアとは、語源的、つまり語彙的な視点より見たときのものであり、意味的に大変ことになった、また少なくとも文体的にことになった単語のペアである)、例 : *causa* – *cosa*, *flama* – *llama*, *argila* – *arcilla*, *argénteo* – *arriero*, *amplio* – *ancho*, *directo* – *derecho*, *concilio* – *concejo*, *consilio* – *consejo*, *factura* – *hechura*, *octavo* – *ochavo*, *delicado* – *delgado*, *famélico* – *jamelgo* (この単語は多分アンダルシア出自であろう)、*película* – *pelleja*, *fastidio* – *hastío*, *rápido* – *raudo*, *cálido* – *caldo*, *estricto* – *estrecho*, *operar* – *obrar*, *lucro* – *logro*, *frígido* – *frío*, *colocar* – *colgar*, *íntegro* – *entero*, *luminaria* – *lumbrera*, *minuto* – *menudo*, *recuperar* – *recobrar*, *coagular* – *cuajar*, *décimo* – *diezmo*, *santificar* – *santiguar*, *lacro* – *lego*, *plaga* – *llaga*, *plano* – *llano*, *vindicar* – *vengar*, *pleno* – *lleno*, *laborar* – *labrar*, *masticar* – *mascar*, *fosa* – *huesa*, *fingir* – *heñir*, *artículo* – *artejo*, *radio* – *rayo*, *cátedra* – *caderra*, *litigar* – *lidiar*, *foro* – *fuero*, etc.

また、教養語と半教養語のペアというものがある (*espátula* – *espalda*, *capítulo* – *cabildo*, *secular* – *seglar*, *respecto* – *respeto*, *respetar* – *respetar*, etc)、また半教養語と民衆語のペアがある (*regla* – *reja*,

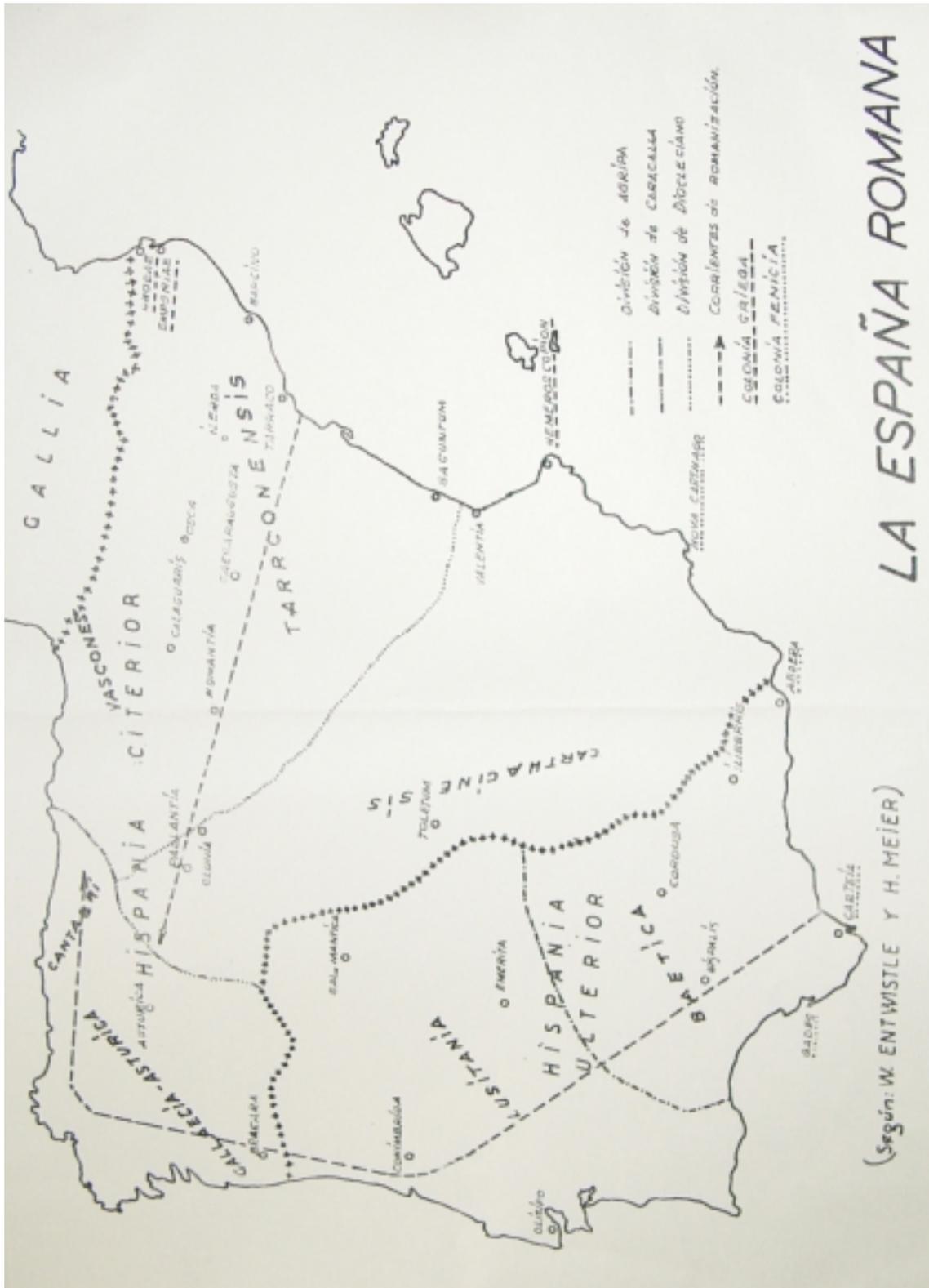
ración - razón, botica - bodega), またラテン語起源の同一の語の中である場合には、教養形式、半教養形式、民衆形式というものもある、例えば、signo, sino, seña (これは *signum* の複数形の *signa* より) などがある。

また教養語は、本来的な教養的語彙にあるが、語形成的要素とか派生要素にも見られる。最上級の語尾、-ísimo, -rimo 等は、教養的出自であるが、これは古典時代にスペイン語に再導入されたものである。それで同じ形容詞より派生した語と最上級形に民衆的/教養的な語の交替形式がある : fiel - fidelísimo, ancho - amplísimo, libre - libérrimo, pobre - paupérrimo がある。しかし-ísimo は民衆形式の形式に適用される : hermoso - hermosísimo, lleno - llenísimo, またラテン語を起源としない形容詞にも見られる ; blanco - blanquísimo, rico - riquísimo, azul - azulísimo, etc. などがある。また接尾辞 -ismo, -ista は教養語であり、動詞の接尾辞 -izar (上記の3つは、ギリシャ語起源) は半教養語である。また接尾辞 -ario, -ero (cf. boticario - alfarero) のような教養的-民衆的なペアもある。

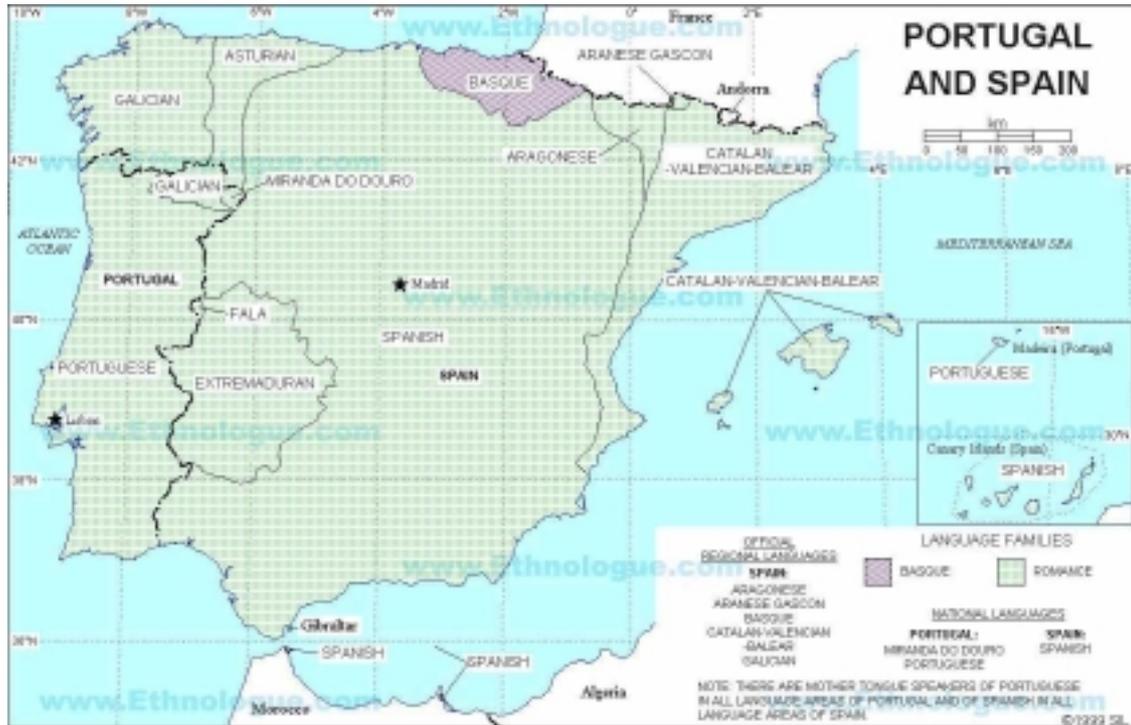
参考書目

- R. Menéndez Pidal - Orígenes del español. 3a. ed., Madrid, 1950
- W. J. Entwistle - The Spanish Language together with Portuguese, Catalan and Basque, 2a. ed., London, 1948.
- J. Oliver Asín - Historia de la lengua española, 6a. ed., Madrid, 1941
- R. Lapesa - Historia de la lengua española., 6a. ed., Madrid, 1950
- R. Spaulding - How Spanish grew. Berkeley – Los Angeles, 1943
- R. Menéndez Pidal – Manual de gramática histórica española, 8a. ed., Madrid, 1949
- G. Baist - Die spanische Sprache (Grundriss Groeber, I, 3, B)
- F. Hanssen - Gramática histórica de la lengua castellana. Ed. Argentina, Buenos Aires, 1945
- G. B. Pelligrini - Grammatica storica spagnola, Bari, 1950.
- V. García de Diego - Gramática histórica española, Madrid, 1951.
- C. H. Grandgent - Introducción al estudio del latín vulgar, 2a. ed. de la trad. Esp., Madrid, 1952.
- G. Battisti - Avviamento allo studio del latino volgare. Bari, 1949
- W. Meyer-Luebke - Introducción a la lingüística románica. Trad. Esp. de la 3a. ed. Alem. Madrid, 1927
- W. Meyer-Luebke - Die lateinische Sprache in den romanischen Laendern (Grundriss Groeber, I, 3, A.)
- P. Savj-Lopez - Le origini neolatine. Reimp., Milán, 1948
- C. Tagliavini - Le origini delle lingue neolatine. 2a. ed., Bolonia, 1952
- W. von Wartburg - Die Entstehung der romanischen Voelker. Halle, 1939
- W. von Wartburg - Die Ausgliederung der romanischen Sprachraeume, Berna, 1950.
- M. Meier - Beitrage zur sprachlichen Gliederung der Pyrenaeenhalbinsol. Hamburg, 1930.

- H. Meier - Die Entstehung der romanischen Sprachen und Nationen, Frankfurt a. M., 1941.
- H. Meier - A formação da língua portuguesa (en “Ensaio de Filologia românica”. Lisboa, 1948)
- M. Bartoli - Per la storia del latino volgare (ahora en “Saggi di Linguistica spaziale”, Turín, 1945)
- M. Bartoli - Caratteri fondamentali delle lingue neolatine (ibid.)
- A. Alonso - La subagrupación románica del catalán (ahora en “Estudios lingüísticos, Temas españoles”, Madrid, 1951)
- A. Alonso - Partición de las lenguas románicas de Occidente (ibid.)
- V. Bertoldi - La glottologia como storia della cultura, Principi metodi Problemi. Con particolare riguardo alla latinità del Mediterraneo Occidentale. Napoles, 1946.
- A. Carnoy - Le latin d’Espagne d’après les inscriptions. 2a. ed., Bruselas, 1906.
- J. Sofor - Lateinisches und Romanisches aus den “Etymologiae” Des Isidorus von Sevilla, Goettingen, 1930.
- R. Menéndez Pidal - El idioma español en sus primeros tiempos. Buenos Aires, 1942.
-



参考（イベリア半島の現在の言語地図）



Miranda do Duero の所在地は、ガリシアのポルトガルの境界線にある。